特 別 講 演

国 際 交 流 の 原 点

― 幕末の漂流者について ―

摂南大学国際言語文化学部教授　中　川　　務
Tutomu NAKAGAWA

二つの文化圏の間に，何かのきっかけで相互の関係が生ずることは歴史の中でめずらしいことではない。このような，歴史も伝統も異った文化を持つひとびとが，ある時期にそれぞれどのような状態であったかという問題を，いわゆる共時的に促えようとする試みが近年やや盛んに行なわれようとしている。「比較文化史」などといわれる立場がそれである。

この二つないし三つの文化圏が何かの繋りを持ち，その文化が衝突したり，融合したり，征服したり，おしつぶされたりするさまを，考究するのが「交渉史」あるいは「関係史」である。

今回問題とする日本と欧米というちがった文化圏，ことに日本とアメリカ合衆国との間には，幕末まで何のかかわりもなかったと言っていいくらいであった。例の「比較文化史」の眼でもって，たとえば 1848 年という年を見ることにする。この年は日本では幕末の嘉永元年という年である。河野健二氏はこの年を「現代史のドラマの始め」とされている。これはもちろんヨーロッパの現代史についてであるが，日本とアメリカ合衆国の関係についても，1848 年はひとつの節目と考えられないこともない。

日本ではすでに 1844（弘化１）年にオランダ国王から将軍に，アヘン戦争で清国が敗れたことが伝えられ，水戸藩主徳川斉昭は，外圧による危機意識をきわめて濃厚に持った者の一人で，1846（弘化３）年に，「紅夷も頗る利口，中々油断相成申さず，諺に所謂御為ごかし，入らざる世話とやら申すものに御座候」と，外国からの情報そのものをも「入らざる世話」と言い切り，場合によっては「清蘭たりとも交易御禁じ然るべく……。」（水戸藩史料）と述べ，現在貿易を許している清国・オランダまでも拒否しようとした。

ところがその後，琉球にフランス軍艦が来航したり，アメリカ軍艦が浦賀に現れたりするにしたがい，情勢はようやく動きはじめ，老中阿部正弘は，まさに 1848 年，幕府の高官や近海守衛の任にあたる諸藩などに，今までの外国船打払令の復旧の可否を諮問している。この諮問によって別に勝れた答えが出るわけでもないのであるが，この諮問が行なわれること自体，打払令への復帰が不可能となったことを示している。1848年はそのような時期であった。

一方太平洋の対岸のアメリカの 1848 年はどうであろうか。アメリカの辺境（frontier）が西へ西へと移り進んで，ついに太平洋岸のOregon，Californiaの地を併合したのが 1848 年であった。同年12月，大統領PolkはCalifornia の領有が中国および太平洋諸島の商業の繁栄をもたらす

ことを述べ，つづいて財務長官 Robert Walker も「最近太平洋沿岸における領土の獲得によって，アジアはそこに隠やかな太洋を狭んで，突如としてわが隣人となった……。」と言った。他にも理由があったが，こうした一種の勢いとも言うべきものが，大統領 Filmore をして，強硬に拒む日本政府と，どうしても通商条約を締結しようとする意欲をますますたかぶらせたとも言える。（アメリカが対日通商条約の締結を急いだ他の理由については後で述べることとする）

このようにして，二つの文化圏で，おたがいの接触ができそうな気運が熟したとき，アメリカ合衆国が，かたくなな日本政府に，その心を問かすべく，言わばその手段として注目されたのがアメリカ船による，日本人漂流者の救済と送還であった。

アメリカ合衆国の対日接近政策（国家として）がはじまるのは 1844～5 年ごろからであるが，漂流者送還と通商を目的に日本に接近する民間人の企画は 1837 年にすでに試みられている。有名なモリソン号事件がそれである。この事件は 1837 年 7 月 30 日（天保 8 ・ 6 ・ 28），アメリカ商社オリファント（Olyphant & co.）派遣のモリソン号は，日本人漂流者 7 人を乗せて浦賀沖にあらわれたところ，外国関係の事務は一切長崎でうけたまわると言われた。この船はある理由で長崎をさけて鹿児島に行ったが，浦賀同様鹿児島でも（文政八年二月の）異国船打払令にもとづいて砲撃をうけ，漂流者の送還は不成功に終った。

この後，幾人かの漂流者が，外国船に援けられて日本に帰って来るのだが，ほとんど上陸できなかったり，刑罰を怖れるあまり，かんじんの漂流者が港に着いても船底にかくれてしまったりという有様であった。そもそも暴風雨その他の理由で遠洋に吹き流され，数多くの場合，そのまま波に呑まれ永遠に大海の水底に朽ち果てるものが少なくなかった中で，幸にも沈没を免れ，異国の領土に漂着したり，あるいは洋上を漂っているところを異国の船に救助されて，からくも命を全うした幸運な人びともいた。そのような例の中でも，無人島に漂着してそのまま故郷と縁が切れ，その地で一生を終えた者もある。さきのモリソン号の場合のように，折角，外国人の親切，あるいは外交政策（日本との通商を求めたいために）によって祖国へ送還されても，故郷の山々を指呼の間に望みながら，鎖国の政策や，外国船打払令のおかげで追い返され，祖国の非情を恨みながら，外地へ戻り，そこに住み着いて全く事情のちがった社会で生き抜かざるを得なかった者もあった。

したがって，漂流の末，日本の土を踏むことのできた者は，幸運中の幸運であったということができる。とはいえ，この連中とても，帰国に際しては，長崎奉行所の扱いとなり，「揚り屋」という座敷牢のようなところへ軟禁される。彼等は「心ならず」とはいえ，国禁を犯して外国をさまよって来た者であるから，犯罪被疑者に準じた取扱いであったという。奉行所の白州（しらす）で取調べを受け，それにしたがって奉行所が「漂流口書（くちがき）」という調書を作成する。この調書が現代までいくつか残っていて，われわれに当時の漂流者の情況を教えてくれる。この取調べ（吟味）の中心となることは，何といっても，切支丹の信仰に染まっていないことの確認であった。

「……私ども，外国又は唐国逗留中，切支丹宗門勧められ候儀は勿論，右体の様子見聞にも及び申さず，いかがと心付候儀も毛頭御座なく候，もしかくしおき外より顕われ候わば如何体の御咎めにも仰せ付らるべく候。」（『神力丸馬丹漂流口書』－石井研堂・「異国漂流奇譚集」より－）

というような文言が，どの「口書」にもでてくることで，このあたりの事情を察することができる。

このようにして，すべて差し支えなしということになると，だいたいは，漂流民の出身地へ帰されたが，海外から持ち帰った物品等についても厳重にチェックが行なわれ，密輸入禁止という立場からはもちろん，日本の生活とあまりにかけ離れた物などは没収されたようである。それにしても，長年の苦労の末ようやく祖国に辿り着いた者を半年から一年くらい拘束して尋問するというのは何といっても非人道的なやり方と言わざるを得ない。

さて，海外漂流のあと日本に帰った人びとの，日本での後半生はどうであったか。一般的に言えば，彼らがせっかく見聞してきた文明についても，西欧流の政治制度や社会の状態についても，それを積極的に語ることは，公然とは許されなかったと見るべきであろう。「ジョン・万次郎」の名前で，帰国漂流民の中でももっとも高名な中浜万次郎の場合でさへ，次のような事実がある。1854（嘉永7）年1月に，Perry がふたたび神奈川沖に来航して通商条約の締結を催促してきたとき，その談判に当ることになった当時の伊豆韮山代官江川太郎左衛門が，その通訳として万次郎を同道したいとの願い出を老中阿部伊勢守（正弘）は，「水戸老公（斉昭）方も深く心配だから」という理由でその願いを婉曲に断わっている。阿部伊勢守は万次郎，長崎奉行の推挙をうけ，幕府の直参となり，江戸の江川邸に住むようになり，御普請役格であったにもかかわらず幕府の保守主義者から敬遠されている。万次郎はそれ以前に，いろいろな口述書などをおおやけにしていて，その中に，「おぼろながら北米合衆国の美点を賞揚する影のほの見ゆ，水戸候が色眼鏡をもって万次郎を見，猜して，米国の間諜となせしことありしも，これらのためなりしなり。（石井研堂・前出書）」という次第である。

万次郎についで有名なのがジョセフ・ヒコ（Joseph Heco）である。彼は1837（天保8）年，播磨国古宮村（現在の播磨町）に生れ，「樽廻船」に属する大型和船「栄力丸」で，遠州灘から漂流をはじめ，漂流52日の後，アメリカ船に助けられ，17人の乗組員の中，彼だけが特別な運命を辿った。

彼はアメリカで，ポルチモアの富豪・サンダースに認められ，カトリック教会で受洗し，アメリカ市民権をとり，アメリカ人となった。いろいろなことがあった後，アメリカ領事・ハリスの通訳として幕末の複雑な時代の外交事務に従事し，日本人を妻にめとり，明治以後主として東京で暮し，1897（明治30）年12月12日にこの世を去っている。彼の場合は万次郎とちがって，「アメリカ市民」という絶対の属性がある。つまり万次郎以下の日本人漂流者のように，「その筋」へ遠慮して口を差控える必要はなかった。そういう意味で，彼の話すアメリカ事情や，幕末の傾向などひどく生き生きとしている。しかし，その見方が，見当はずれであるところも多い。

Hecoは自分のことを「彦蔵」といい，「播州彦蔵しるす」とした「漂流記」上，下，（1863）を残した。また晩年には英文の自伝"A Narratiue of a Japanese" 2 vols.'（第2巻は1892. 上巻の出版年は不明）を著した。このたびは，このJoseph Hecoについて，この二種類の書籍を中心として，彼をとりまく世界と，彼が生きた日本とアメリカ合衆国との関係を，冒頭に述べた，比較文化史，関係史の立場でとりあげてみることにする。

参考文献（必ずしも学術的なものではない。簡単に手に入れることのできるものに限る）

1. 『アメリカ彦蔵自伝』〔1964，全二巻・中川努・山口修訳，平凡社・東洋文庫〕"Narrative"の訳，山口氏の担当した「注」は，彦蔵の内外の背景を知るのに便利である）

2. 「漂流記」を活字にした本。

『異国漂流奇譚集』〔石井研堂編，1971，新人物往来社〕

『近世漂流記集』荒川秀俊編 1969，法政大学出版局〕

3. 『ジョセフ・ヒコ』〔近盛晴嘉 1980，日本ブリタニカ〕

Joseph Heco の詳細な文献目録がついている。著書はヒコ研究の日本における第一人者，他に同氏によるヒコに関する著書・論文・覚書も多い〕

4. 『漂流』ジョセフ・ヒコと仲間たち〔春名徹・角川選書〕

永力丸の漂流について全体的展望をあたえる好著である。

『にっぽん音吉漂流記』〔1979，晶文社〕同著者によるもので，漂流者をさらに広い歴史の舞台でとらえたもので，興味をひく作品。巻末の詳細な〔注〕も有益である。

5. 『中浜万次郎の生涯』〔中浜明・富山房，1970〕